

2026年 いざ世界遺産登録へ！

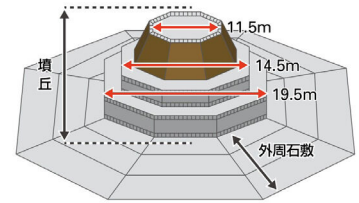
「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産を紹介します

●中尾山古墳 (なかおやまこふん)

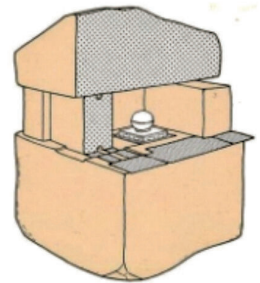
中国思想の影響のもと、天皇を中心とする国づくりに必要であった絶対的な権威を表すために、日本独自につくり出された三段築成の八角墳です。他に類を見ないほど石室が非常に小さく、棺が入らないことから、この古墳がつくられた時には、仏教思想に基づいた火葬が導入されていたことがわかります。

中尾山古墳は江戸時代からすでに認知されており、文武天皇の「ひのくまあこのおかのへのみささぎ檜隈安古岡上陵」の候補地として、『大和名所図会』等の文献資料に記されています。

中尾山古墳は丘陵の頂上にあり、つくられたのは8世紀初頭頃と推定されています。平城京への遷都以降、墳丘をつくらず、山そのものを墳墓とする形式へと移行していきます。中尾山古墳は3世紀中頃から始まった日本の古墳文化の終焉を示しています。



▲墳丘復元図
(関西大学ニュースレター「Reed」No.64 P.04より転載)



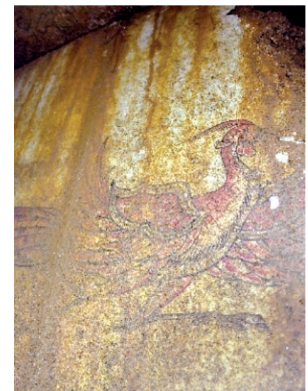
▲石室・骨蔵器設置イメージ

●キトラ古墳 (キトラこふん)

墳丘の直径が約13mと比較的小さな円形であることや漆塗り木棺が採用されていることから、天皇の陵墓である八角墳に次ぐ、皇族や有力貴族の陵墓である可能性が高いと考えられています。

1983年にファイバースコープを用いた調査によって、石室内から極彩色壁画が発見されました。描かれている四神図、十二支像図、日月図などの図像からは、キトラ古墳が中国の思想・美術・造形に強く影響を受けたことを明確に示しています。特に、天文図は東アジア最古の現存例です。石室内からは、棺飾金具のほか、刀装具や、玉類などの副葬品が出土しました。

1998年以降の発掘調査によって、13世紀に盗掘を受け、石室内が荒らされたことが判明しました。背面に丘陵を配した立地は、中国の風水思想の影響を受けており、墳丘が土を押し固めてつくられていることから、中国・朝鮮半島の土木技術の影響がみられます。



▲石室南壁：朱雀



▲出土遺物
(提供：奈良文化財研究所)